

小林秀雄 初期文芸論集

小林秀雄 著



小林秀雄初期文芸論集

岩波クラシックス 32

1983年3月28日 第1刷発行 ©

定価 1800 円

著 者 こ ばやし ひで お
 小 林 秀 雄
発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式 岩 波 書 店
 会社
 電話 03-265-4111
 振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・文勇堂

落丁本・乱丁本はお取替いたします Printed in Japan

小林秀雄初期文芸論集



小林秀雄 著

岩波クラシックス

目 次

凡 例

様々なる意匠	一
志賀直哉——世の若く新しい人々へ	三
アシルと亀の子Ⅰ	四九
アシルと亀の子Ⅱ	六二
アシルと亀の子Ⅲ	七五
アシルと亀の子Ⅳ	八三
アシルと亀の子Ⅴ	九三
文学は絵空ごとか	一〇一
横光利一	一一〇

批評家失格Ⅰ 一二三

物質への情熱 一三五

マルクスの悟達 一四八

心理小説 一六二

文芸批評の科学性に関する論争 一七一

再び心理小説について 一八四

おふえりや遺文 一九七

批評について 二一六

現代文学の不安 二二四

Xへの手紙 二三七

年末感想 二六六

手帖Ⅱ 二七四

故郷を失った文学 二八五

批評について 二九七

文学界の混乱 三〇七

レオ・シェストフの「悲劇の哲学」	三三二
林房雄の「青年」	三三五
「紋章」と「風雨強かるべし」とを読む	三四九
文芸時評について	三六〇
私小説論	三七二
新人Xへ	四〇六
ランボオI	四一七
解 説	(中村光夫) 四三二
索 引	

凡 例

一、本書は、一九二九年（昭和四年）から一九三五年にかけて執筆された文芸評論、小説、アフォリズム、エッセイなど、著者の多岐にわたる文学的営為から三〇篇を精選、これを編年順に配列したものである。

一、あわせて巻末に一九二六年に執筆された「ランボオー」を収めた。

一、本文は『新訂小林秀雄全集』一～四巻（新潮社 一九七八年）を底本とし、執筆年月日は『小林秀雄全集』（新潮社 一九六七～一九六八年）の「解題」に拠った。

一、各作品の末尾に、初出の原標題と掲載紙誌名を「」の中に記した。

一、本文の仮名遣いは現代仮名遣いに従い、若干の漢字を平仮名に改め、難読の語および読み誤りやすい語や人名などには振り仮名を付けた。また、適宜に読点を補った箇所がある。

小林秀雄初期文艺論集

様々なる意匠

懷疑は、恐らくは叡智の始めかも知れない、しかし、叡智の始まる処に芸術は終るのだ。
アンドレ・ジイド

1

吾々にとって幸福な事か不幸な事か知らないが、世に一つとして簡単に片付く問題はない。遠い昔、人間が意識と共に与えられた言葉という吾々の思索の唯一の武器は、依然として昔ながらの魔術を止めない。劣悪を指^{しそ}駭^そしない如何なる崇高な言葉もなく、崇高を指^{しそ}駭^そしない如何なる劣悪な言葉もない。しかも、もし言葉がその人心眩惑^{げんわく}の魔術を捨てたら恐らく影に過ぎまい。

私は、ここで問題を提出したり解決したりしようとは思わぬ。私はただ世の騒然たる文芸批評

家等が、騒然と行動する必要のために見ぬ振りをした種々な事実を拾い上げたいと思う。私はただ、彼らが何故にあらゆる意匠を凝らして登場しなければならぬかを、少々不審に思うばかりである。私には常に舞台より楽屋の方が面白い。このような私にも、やっぱり軍略は必要だとするなら、「搦手^{からめて}から」、これが私には最も人性論的法則に適^{かな}った軍略に見えるのだ。

2

文学の世界に詩人が棲^すみ、小説家が棲^すんでいるように、文芸批評家というものが棲^すんでいる。詩人にとっては詩を創^つる事が希^{ねが}いであり、小説家にとっては小説を創^つる事が希^{ねが}いである。では、文芸批評家にとっては文芸批評を書く事が希^{ねが}いであるか？ 恐らくこの事実は多くの逆説^{はら}を孕^{はら}んでいる。

「自分の嗜好^{しこう}に従^{したが}って人を評するのは容易な事だ」と、人は言う。しかし、尺度に従^{したが}って人を評する事も等しく苦もない業である。常に生き生きとした嗜好^{しこう}を有し、常に潑刺^{しきせき}たる尺度を持つという事だけが容易ではないのである。人々は人の嗜好^{しこう}というものと尺度というものとを別々に考えてみる、が、別々に考えてみるだけだ、精神と肉体とを別々に考えてみるように。例えば月の世界に住むことは人間の空想となる事は出来るが、人間の欲望となる事は出来ない。守銭奴は金を蓄^ためる、だから彼は金を欲^ほしがるのである。人は可能なものしか真に望まぬものである。これがあたかも嗜好^{しこう}と尺度との論理関係である。生き生きとした嗜好^{しこう}なくして、如何にして潑刺^{しきせき}た

る尺度を持ち得よう。だが、論理家等の忘れがちな事実はその先きにある。つまり、批評という純一な精神活動を嗜好と尺度とに区別して考えてみても何ら不都合はない以上、吾々は批評の方法を如何に精密に論理づけても差支えない。だが、批評の方法が如何に精密に点検されようが、その批評が人を動かすか動かさないかという問題とは何んの関係もないという事である。例えば、人は恋文の修辭学を検討する事によって己れの恋愛の実現を期するかも知れない、しかし斯くして実現した恋愛を恋文研究の成果と信ずるなら彼は馬鹿である。あるいは、彼は何か別の事を実現してしまつたに相違ない。

かつて主観批評あるいは印象批評の弊害という事が色々論じられた事があつた。しかし結局「好き嫌いで人をとやかく言うな」という常識道徳のあるいは礼儀作法の一法則の周りをうろついたに過ぎなかつた。あるいは攻撃されたものは主観批評でも印象批評でもなかつたかも知れない。「批評になつていない批評」というものだったかも知れない。「批評になつていない批評の弊害」では話が解りすぎて議論にならないから、という筋合ひのものだったかも知れない。ともかく私には印象批評という文学史家の一術語が何を語るか全く明瞭でないが、次の事実は大變明瞭だ。いわゆる印象批評の御手本、例えばポオドレエルの文芸批評を前にして、舟が波に掬われるように、繊鋭な解析と潑刺たる感受性の運動に、私が浚われてしまふという事である。この時、彼の魔術に憑かれつつも、私が正しく眺めるものは、嗜好の形式でもなく尺度の形式でもなく無双の情熱の形式をとつた彼の夢だ。それは正しく批評ではあるがまた彼の独白でもある。人は如

何にして批評というものと自意識というものとを区別し得よう。彼の批評の魔力は、彼が批評するとは自覚する事である事を明瞭に悟った点に存する。批評の対象が己れであると他人であるとは一つの事であつて二つの事でない。批評とは竟に己れの夢を懷疑的に語る事ではないのか！

ここで私はだらしない言葉が乙に構えているのに突き当る、批評の普遍性、と。だが、古来如何なる芸術家が普遍性などという怪物を狙ったか？ 彼らは例外なく個体を狙ったのである。あらゆる世にあらゆる場所に通ずる真実を語ろうと希ったのではない、ただ個々の真実を出来るだけ誠実に出来るだけ完全に語ろうと希っただけである。ゲエテが普遍的な所以は彼がすぐれて国民的であつたがためだ、彼が国民的であつた所以は彼がすぐれて個性的であつたがためだ。範疇的^{ちゆう}先験的^{せんげん}真実ではない限り、あらゆる人間の真実の保証を、それが人間的であるという事実以外に、諸君は何処に求めようとするのか？ 文芸批評とても同じ事だ、批評はそれとは別だという根拠は何処にもないのである。最上の批評は常に最も個性的である。そして独断的という概念と個性的という概念とは異なるのである。

方向を転換させよう。人は様々な可能性を抱いてこの世に生れて来る。彼は科学者にもなれたろう、軍人にもなれたろう、小説家にもなれたろう、しかし彼は彼以外のものにはなれなかった。これは驚くべき事実である。この事実を換言すれば、人は種々な真実を発見する事は出来るが、発見した真実をすべて所有する事は出来ない、或る人の大脳皮質には種々の真実が観念として棲息^{そく}するのであるが、彼の全身を血球と共に循る^{めぐ}真実は唯一つあるのみだという事である。雲が雨

を作り雨が雲を作るように、環境は人を作り人は環境を作る、かく言わば弁証法的に統一された事実、世のいわゆる宿命の真の意味があるとすれば、血球と共に循る一真実とはその人の宿命の異名である。或る人の真の性格といい、芸術家の独創性といいた異なったものを指すのではないのである。この人間存在の厳然たる真実は、あらゆる最上芸術家は身をもって制作するといふ單純な強力な一理由によって、彼の作品に移入され、彼の作品の性格を拵こしらえている。

芸術家たちのどんなに純粹な仕事でも、科学者が純粹な水と呼ぶ意味で純粹なものはない。彼らの仕事は常に、種々の色彩、種々の陰翳いんえつを擁して豊富である。この豊富性のために、私は、彼らの作品から思う処を抽象する事が出来る、と言う事はまた何を抽象しても何物かが残るという事だ。この豊富性の裡うちを彷徨ほうこうして、私は、その作家の思想を完全に了解したと信ずる、その途端、不思議な角度から、新しい思想の断片が私を見る。見られたが最後、断片はもはや断片ではない、たちまち拡大して、今了解した私の思想を吞んでしまうという事が起る。この彷徨はあたかも解析によって己れの姿を捕えようとする彷徨に等しい。こうして私は、私の解析の眩暈げんうんの末、傑作の豊富性の底を流れる、作者の宿命の主調低音をきくのである。この時私の騒然たる夢はやみ、私の心が私の言葉を語り始める、この時私は私の批評の可能を悟るのである。

私には文芸批評家たちが様々な思想の制度をもつて武装していることを兎や角かくいう権利はない。ただ鎧よろいというものは安全ではあるが、随分重たいものだろうと思うばかりだ。しかし、彼らがどんな性格を持っていようと、批評の対象がその宿命を明かす時まで待っていられないという